令和５年度　学校経営報告書

八王子市立みなみ野君田小学校
校長　有本　香織

１　小中一貫教育の推進（みなみ野中学校グループ）

目標	重点的な方策	自己評価（〇：成果　△：課題）
義務教育９年間の学びに自覚と責任をもった教育活動の推進	みなみ野中学校グループ挨拶運動、児童・生徒情報引継ぎの会を確実に実施する。	〇挨拶運動、３月の小中引継ぎを実施し、小中系統だった生活指導を推進し、児童生徒の心身の健康を図ることができた。
	小小交流、小中交流を実施し、中一ギャップの軽減を図るとともに、みなみ野中学校グループの一員としての自覚を育む。 ※七国小学校、七国中学校との連携も図る。	〇６月みなみ野中学校と合同桑都かるた大会を実施、「はちおうじっ子サミット」を通して、グループ生としての意識を育むことができた。 △同学年の小小交流を実施できていない。今後実施していく。 〇１月みなみ野中生徒会による中学校生活の紹介を実施し、中一ギャップの軽減を促進できた。 △10 月みなみ野中学校合唱祭での小中３校合同合唱は学級閉鎖により実施できなかった。令和６年度も引き続き計画する。 〇七国中学生の職場体験の実施、６年生の部活動見学、全校朝会での七国中学生による英語スピーチを実施し、七国中学校との連携も図ることができた。
小学校と中学校のカリキュラムのつながりの強化	小中３校で市学力定着度調査の分析結果を活用した指導方法の改善を図り、９年間ではちおうじっ子ミニマムの確実な定着を図る。	〇小中３校でグループの独自習得目標問題（算数科）の取組を実施した。小中３校で連携を図り、分析、指導方法改善を推進した。 △市学力定着度調査の分析については、校内での分析となった。今後はグループ３校で分析、指導方法改善を図り、はちおうじっ子ミニマムの確実な定着にも繋げていく。 〇年３回の小中一貫教育の日では、３校共通した ICT 機器の活用に向けて情報共有できた。令和６年度より授業で共通の ICT 機器の活用を実践していく。

２　確かな学力の育成

目標	重点的な方策	自己評価（〇：成果　△：課題）
基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着	朝学習、補充学習の効果的な活用を通して、基礎的・基本的な内容の定着を図る。	〇放課後補習「のびのびタイム」（教員）、放課後補習教室「パワーアップタイム」（地域人財）、放課後子ども教室「きみだランド」（宿題の取組）の３つの場を児童が活用できた。 〇朝読書を年間 60 回実施し、児童の読解力、想像力、表現力の向上及び読書習慣の定着が図られた。 △算数のレディネステストを活用した未定着の学習内容を放課後補習教室で習熟する取組を計画したが、円滑な実施には至らなかった。仕組を見直し放課後補習教室を有効活用できるよう改善していく。
	【新規】地域と連携した放課後補習教室を週２回実施する。	
	【新規】校内に学力向上推進組織を設置し、学力の分析及び対策を検討し実施する。	〇市学力定着度調査を分析し、課題を明確にすることはできた。 △正答率の低い項目について、組織的に補充を強化する取組を実施していく。

主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善の推進	年間６回の算数科の研究授業を通して、みなみ野君田小授業スタンダードを確立し、個別最適な学びと主体的・協働的な学びの実現に向けた授業改善を図り、児童の思考・表現する力を育成する。	○年６回研究授業を実施し、連鎖的な授業改善を図った。児童が主体的に学ぶための問いの精選等、学校全体で指導の共通化を図り、児童の主体的に学ぶ力を育成できた。 △個別最適な学びの充実については課題が残った。来年度の校内研究に位置付け強化する。
	ICT 機器を効果的に活用した授業を展開する。	○年３回授業観察の中で、ICT 機器の効果的な活用を位置付けた。また、ICT 機器の授業での活用力向上のための OJT を計画的に実施し、全教員が ICT 機器を有効活用した授業を実施できている。
体験的・協働的な活動の充実による思考力・判断力・表現力の育成	身近な郷土学習において、発達段階に合わせた課題を設定し、主体的・協働的に解決する探求的な学習を通して、思考力・判断力・表現力を育成する。	○３年生以上の全学年で郷土学習を行った。児童の郷土愛及び主体的・協働的に学ぶ力を育成できた。 ３年生：「蚕を育てよう・八王子の絹織物」 ４年生：「高尾山　日本遺産学習」 ５年生：「八王子市の特色調べ・紹介」 ６年生：「八王子市姉妹都市日光の学習」
	算数科・理科を中心にプログラミングのアプリケーションやツールを活用した学習を展開し論理的思考力を育成する。	○地域企業によるプログラミング教育(年 30 回)を実施し、児童の興味関心を高めるとともに、論理的思考力の育成を図った。 △算数科・理科におけるプログラミング教育の計画の実施を徹底していく。

３　**豊かな心、人間性の育成**

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
自己肯定感及び自己有用感の育成	問題行動調査やふれあい月間の取組を通して、認知されたいじめについて確実な解消まで継続して対応し、解消率の向上を目指す。また、いじめ対応の時間を活用し、子どもの心身の健全な育成及び自己肯定感を培う。	○ふれあい月間の取組で認知したいじめについて、いじめ対応の時間や生活指導夕会等において全教職員で共有し、確実な解消まで継続して対応した。 ○いじめ対応の時間、見守りシートの活用を確実に実施し、児童に寄り添った早期対応ができたことで、重大事態につながるいじめはゼロであった。
	不登校や登校しぶり傾向の子どもについては、校内委員会を含め、地域の関係機関とも連携しながら、安定した登校ができるよう支援していく。	○不登校や要支援児童について、適時校内委員会を開催し情報及び対応を共有した。市登校支援チームのスクールソーシャルワーカーとの連携を強化し、全児童が学校や地域と繋がることができた。 ○全教員が同じ考えのもと同じ対応ができるよう「不登校対応マニュアル」を作成した。 △「不登校対応マニュアル」の活用を徹底していく。

	【新規】校内での子どもが安心できる居場所づくりを推進し、どの子も安心して通える学校づくりを推進していく。	○地域コーディネーター、放課後子ども教室と連携し、朝の校庭開放『早朝きみだランド』を開始し、子どもの朝の居場所づくりを行った。今年度は月・金曜日の午前７時から午前７時 55 分までの実施とし、毎回約 100 名の児童が活用している。 →　令和６年度から毎日開催する。 ○学校運営協議会に相談し、地域人財を活用した適応支援ルーム『ぽかぽかルーム』（月・金曜日の午前中）を開設し、不登校や登校しぶり、学校不適応の児童の居場所づくりを行った。 →　令和６年度から毎日開設する。 ○多様な児童の心の拠り所・つながる場所づくりとして、全校児童に向けて、中休み・昼休みの校長室開放を実施した。年間延べ約 1500 人の児童が利用し、児童にとって居場所の選択肢を一つ増やすことができた。
	道徳科の授業を始めとする教科指導や生活指導、特別活動、学校行事などを通して自他の良さに気付かせ、自己肯定感を高める。	○異学年交流や学校行事等児童が自ら創意工夫して運営する取組の充実を図り、主体的に取り組む態度を育んだ。児童アンケートの主体性の項目では、肯定的回答は約 90%であった。 ○年間を通して、学校便り、ホームページ等で保護者・地域に協働を呼び掛けた。児童アンケートの自己有用感の項目では、肯定的回答は 90%以上であった。 △自己肯定感・自己有用感の低い児童について、引き続き教科指導や学校行事等学校生活の中で、自他の良さに気付けるよう働きかけを継続していく。
自主的・自律的態度の育成	完全ノーチャイムを継続し、自主的・自律的に生活する態度を育成する。	○児童は時間意識をもって行動し、きまりを守る自律的な生活態度が身に付いている。

４　健やかな身体の育成

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
体力向上の推進	毎学期、全校で体力向上及び体つくり運動に取り組む。２学期、３学期に長縄大会を実施し、目標に向かって仲間と頑張る力を養う。	○運動週間として、１学期は柔軟性を高める運動、２学期は持久走、３学期は短縄に全校児童が取り組み、体力向上を図るとともに、運動する楽しさを味わわせることができた。 ○２学期、３学期に長縄大会を実施した。クラスごとに練習に励み、目標に向かって頑張る力を養うとともに、仲間と共に成し遂げるよさを感じさせることができた。
	オリンピック・パラリンピックのレガシーとして、トップアスリートやスポーツの専門家を招き、子どものスポーツ志向を高める。	○年４回アスリートやスポーツの専門家による授業を実施し、みなみ野君田小学校オリンピック・パラリンピック 2020 レガシーとして定着させることができた。来年度も引き続き計画していく。
健康への関心の向上	１～３年生では、栄養士をゲストティーチャーとして、給食の食材を活用した体験活動や食育の授業を実施する。	○１～３年生全クラスで栄養士による食育の授業を実施し、児童の食への興味・関心を高めることができた。

5　地域人財・地域資源を活用した教育活動の充実

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
地域人財や地域資源を活用した教育活動の推進を通した地域の一員としての自覚の育成	学校運営協議会が主体的に取り組む教育活動（漢字検定、体験型サマースクール、君田畑プロジェクト）を実施する。	○11 月に学校運営協議会主催･保護者ボランティア協働による漢字検定を実施した。約 150 名の児童が参加し、児童の学習意欲の向上を図ることができた。 ○学校運営協議会主催の体験型サタデースクールを年間８回開催し、児童の体験活動の充実を図ることができた。 ○君田畑プロジェクトを計画的に実施し、植物を育てる活動を通して学習の充実を図ることができた。
	「社会の力活用事業」「地域の企業や大学」「学習支援ボランティア」等の地域人財を積極的に活用した教育を展開する。	○地域企業によるプログラミング教育(年 30 回)、ネイティブスピーカーによる英語授業補助（通年)、看護師による性教育等、地域人財の活用を推進し、学習内容の充実を図ることができた。
	【新規】学校運営協議会を中心に地域人財を活用した放課後補習教室「パワーアップタイム」を週２回実施する。	○年間を通して、地域人財を活用した放課後補習教室を週２回確実に実施し、学習習慣の確立及び学習内容の定着を図ることができた。 △さらに効果をあげるため、はちおうじっ子ミニマム、東京ベーシックドリルの分析結果と関連させた運用の仕組を確立させる。
	【新規】保護者・地域の読み聞かせボランティア「おはなしスタジオ」の充実を図り、情操教育を推進する。	○保護者による読書ボランティアに加え、「おはなしスタジオ」への参加学年を全学年に拡大し、児童の想像力の育成及び感情の理解や共感力の促進の向上を図る機会を増やしたことで、児童の感性を豊かに育むことができた。 ○学校公開時に「おはなしスタジオ」の活動を実施した。広く保護者・地域に知らせることで、情操教育の取組についての理解が深まった。

6　学校組織の機能強化

目標	重点的な方策	自己評価（○：成果　△：課題）
ライフ･ワーク･バランスの理念に基づいた校務改善の推進	校務システムを活用した業務連絡の徹底や、ICT 機器のアンケート機能の活用による作業の効率化を図り、教員が児童に向き合う時間を生み出す。	○ICT 機器によるアンケートは活用できた。 ○校務システムの活用率は前年比 130%であった。夕会を週２回に減らし、教員が児童と向き合う時間を確保することができた。来年度は夕会週２回を固定化する。 △校務システムを活用した業務連絡と夕会での連絡が重複することがあった。伝達事項を精査し、効率化を図る。
	【新規】令和６年度の教科担任制完全実施に向けて試行的に実施し、教材研究や授業準備の時間の充実を図る。	○来年度から円滑に完全実施できるよう、段階的に１学期は交換授業、２学期は１単元交換授業、３学期は全学年で一部教科担任制を実施した。 △時間割の調整等課題がある。円滑な実施について情報を集めながら今年度の課題について改善策を講じながら令和６年度から実施する。

校内支援体制の確立	週１回、いじめ対応の時間を設定し、いじめ防止対策、いじめの早期発見・早期対応の校内支援体制の確立を図る。	○毎週木曜日の６時間目にいじめ対応の時間を設定し、教員、養護教諭、生活指導主任と情報を共有し、いじめ防止及びいじめの早期発見・早期対応に努め、組織的な対応ができた。引き続き組織対応の充実を図り、重大事態につながるいじめゼロを目指す。
	毎月､校内委員会を開催し、校内の特別支援に係る諸問題について関係諸機関と連携を図り対応していく、支援体制の確立を図る。	○月に１回、必要に応じて適時、校内委員会を開催した。特別支援コーディネーターを中心に、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、特別支援教室、関係諸機関との連携を図り、養護教諭、教員と、児童の情報を共有し対応することができた。 △校内教職員全員が同じ対応ができるよう共通理解の一層の充実を図る。